

峠の向こうは春

希望進路の本格的な選択に向けて

京都の公立高校の入試のしくみについて、3号に渡って改めて説明しました。

希望進路を決定していくためにしっかり理解してほしいと思います。みなさんの中には、受験する高校を決定し、その進路実現に向けて決意をして頑張っている人もいますが、まだ多くの方が決定することができず学校説明会に参加しています。希望進路決定の時期は、ひとそれぞれ違いますので、遅いからダメという訳ではありません。(ただ、12月の三者懇という期限はあります) 納得いくまでしっかり、家の人や担任の先生と相談して決定して下さい。分からないことがあれば、率直に尋ねてください。人は誰でも、決定できたらそれなりの決意ができて、目標に向かって真っ直ぐに進むことができます。

さて、その希望進路選択に向けて、高校の選びの重要な視点、つまり大原則とも言えることがあります。それは、自分にとって「良い学校」を正確に選択することです。しかし、これまで、こんな声を耳にしたことがあります。

「A高校は、B高校よりレベルが高いので、A高校を選びました。」

「C高校なんて、レベルが低いから行きたくない。」

「僕は、D高校の学習内容が合っていると思うけど、みんなD高校なんて誰でも入れる高校や、って言います。」

等々、こういった「見方」「価値観」は、さまざまな人々が、さまざまな言い方で言っています。みなさんは、どう思いますか。一緒に考えてほしい視点を述べます。

第一に、この種の問題は、みなさん中学生固有の問題ではありません。私たち大人も含めたこの日本で長い間問われている課題です。よく考えれば、日本には、さまざまな職業、さまざまな学校があります。その職業や学校を評価する場合の物差しとして、「難しい資格試験を合格しないと就けない職業」「売り上げが世界的にも群を抜いている大企業」「合格するのが難しい高校」「人気があり倍率が高い高校」という視点があります。これはあくまでも一つの物差しであり、これがすべてではありません。つまり、その人の価値を決めるあるいは人生を幸せにするすべてではないということです。大企業と言われる会社に勤めていても、長時間労働で悩んでいる人もいれば、大企業とは言われていない会社で働いている人も、生き生きと生活している人もいます。

どんな職業であろうと、どんな高校であろうと、そこで一生懸命働き生きている、あるいは学んでいる人たちがいます。「職業に貴賤はない」「高校に貴賤はない」、これだけは押さえてほしいと思います。お互いにリスペクトできる、どんな職業であっても、どんな高校であっても尊重できる価値観を、私たちは持ち合わせていなければならないと思います。以前の通信でも書きましたが、自分とは意見が違つと、感情的攻撃的になる人の何と愚かなことか。それぞれの立場の違い(この場合は、職業や高校などの違い)を尊重し、相手をリスペクトできることこそ、これから日本の将来を担うみなさんに身につけて欲しいことの一つだと思っています。

第二に、当面自分の希望進路を決定しなければならないみなさんにとって、「良い学校」とは、人によって違うということです。だから「合格するのが難しい学校」が全ての人にとって「良い学校」ではありません。大切なのは、みなさんそれぞれが自分にとっての「良い学校」

を見つけることです。そのためには自分を見つめて、「自分が何を求めているのか、何が得意なのか」を見つけることが重要です。もし仮に答が見つけれなくてもいいと思います。「そんな難しいことは、まだわからない」と思う人がいるかもしれませんが、あと半年で義務教育が終了する今が、全ての中学3年生がこのテーマに向き合って考える時期なのだと思います。

受験は個人的な活動

さて、「受験」とは、まず「自分の志望校に合格する」ことが目標なので、個人的な活動となります。周囲の人がどんなに学習をしてくれても、自分の学力は高まりません。三中祭の道具づくりが間に合わなければ、誰かが「手伝おう!」と言ってくれると思いますが、入学試験の最中に、答えがわからず困ってしまっても、誰も助けられません。

だから、自分で「やるんだ!」という意志を持ち、頑張るしかありません。

このように「自分」を強く意識するのが「受験」ですが、「自分さえ良ければ良いんだ!」と考えてしまったり、そこまで極端ではなくても「周囲の人の想いや願いを感じられない、受け止められない」ようになってしまっはけません。

受験のプレッシャーに負けて、今まで培った「あたたかい人間性」や「周囲との人間関係」を失うのは悲しいです。「**受験(進路)**とは、**自分の幸福な人生を掴むための活動なのに、その実現のために必要な財産である「あたたかい人間性」や「人間関係」を失うのは、目的を見失っているように感じます。**

受験は集団活動

～ヘルプを求める勇気とヘルプに応える心～

ところで、「入学試験」は個人的な活動ですが、「入試までの学習(学力などを高める活動)」では「**集団活動**」が必要です。

例えば、授業などでの「学習しようというムード」は学級集団が作ります。そして、集中力が続かず、つい気持ちが折れてしまう人でも、周囲のみんなが「学習に真剣!」であれば、「あ、頑張らねば!」と再び学習に向き合えると思います。

また「分からないことを、誰かに聞ける」というのも大きな力になります。しかし「聞ける」ためには、自分が解っていないことを伝えても「相手はバカにしない」という信頼関係が必要です。時として、人の失敗や間違いを「からかう」発言が聞かれるクラスもあります。言っている人も、言われている人も「本気ではない」「ふざけ合っているだけ」なのだと思いますが、その会話を聞いている人に「安心して自分の弱点(分からないという事実)をオープンにできない」と感じさせる内容なのではないでしょうか。中学校に限らず、学校とは「できなかったことができるようになる」「分からなかったことが分かるようになる」場所だと思います。だから「できない」「分からない」のが問題ではありません。

また「教えてもらおう」と決意してもらうためには「**教えてやる**」という「上から目線」を感じさせないことも大切です。同じ学年の友だちとの間で上下関係を感じるのはイヤですよね。

そして教える人には、自分の大切な学習時間を削っても、「相手を支えたい」という気持ち(友情)も必要です。(自分も進路実現に向けて学習したい時間だけど、)「彼(彼女)が困っているなら力になりたい」と思える相手が「友」と呼べる人でしょう。実は、誰かに教える活動は、最も学力が定着する学習活動です。

以上のことを、先生は、三年生の担当をするたびに、この時期には「ヘルプを求める勇気」と「ヘルプに応える心」が必要だと言っています。ヘルプを求める勇気が出せるクラス、そしてそのヘルプを感じて応える心があるクラス、そんなクラスが最も人間らしいクラスと言えるでしょう。そういうことを、受験勉強に取り組むことを通して身につけることができるのなら、大人になって社会に矛盾を感じても、人間らしさが分かる大人となっていることだろうと思います。

